

# 西南学院小学校 学校長メッセージ

## 「学校通信 Wings 2020年1月号」

求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。  
門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。                      マタイによる福音書7章7節

新年明けましておめでとうございます。穏やかな天候に恵まれた年末年始でしたが、それぞれのご家庭で楽しいお正月を過ごされたことと思います。

今年は、2020年代という新しい10年間（Decade）の幕開けの年です。少し前、担任のときに発行していた学級通信を読み返していたところ、今から40年前の1980年5年生の担任していたときの1月号に次のようなことを書いているのを見つけました。

「今年は1980年代という新しいディケイド（10年間）の始まりでもあります。考えてみますと、80年代は子どもたちが青春の大部分を過ごし成人の日を迎える、彼らにとっては一生の中で最も重要な10年間といえるのではないのでしょうか。その80年代ですが、内外の情勢を見ても『激動の』と言われた70年代以上に激動の時代になることは必至のようです。」

この通信を出してからちょうど10年後の1990年。バブルが終焉を迎える頃でしたが、この年の年末に出した通信では次のような新聞のコラムを紹介していました。

「来春、大学を卒業する知り合いの若者と話をしているうちに、彼がゴルフ場の会員権を四つも持っていることがわかった。沖縄に造成中の二つのゴルフ場が募集したもので、いずれも200万円。計800万円支払って、1年ほど前に入手したそうだ。『君、いったいそんな大金をどうやって用意したんだ。』驚いてたずねると、『100万円はゴルフ場からの融資。700万円は自己資金。大学に入ったころ、おふくろから200万円借りて、株で儲けたんですよ。』と言う。断っておくが、彼は働きながら東海地方の大学で児童福祉を勉強しているまじめな学生だ。母親と4人の弟妹をかかえる一家の大黒柱でもある。株を手にしたのも『預金より有利と判断した』からだ。ゴルフなんてしたことはないし、どんな遊びなのかもよく知らない。沖縄に出かけたことはない。『株がおかしくなったので、投資先を変えただけです。』計800万円の会員権は、ゴルフ場がオープンする来春には5200万円となり、『将来更に値上がりするのは確実』と会社側は青年に説明したそうだ。歪んだ経済はついに『苦学生』をも投機に誘い込み、ゴルフ場はその格好の対象となった、ということであろうか。

言葉を失っていると、『実はおふくろにしかられましてね。』と青年が言った。『うちは借家なんです。おふくろ喜べ。これでとうとう家を買えるぞ、って会員権を持っていったら……』看護助手として働いている母親は、こう言ったそうである。『汗を流して稼いだお金なら嬉しいが、株といい、会員権といい、お前がやっていることはギャンブルだ。息子からそんなお金を贈られて喜ぶ母親がいると思うか。』

青年はそんな母親を密かに尊敬している。『でも、おふくろのような生き方では一生浮かび上がれないな。』とも思う。けれども、若者よ。あえて浮利を拒んで生きる人々が、この国を支えているのだ。（朝日新聞「窓」）

紹介されていた青年は1980年に受け持っていた子どもたちと同年代です。現在彼らは50歳。どのような10年間を過ごし、どのような人生を歩んでいったのか、もし可能であれば、新聞の青年も含め一人ひとりの「物語」を聞いてみたいものです。

本校の子どもたちが青少年期を過ごすことになる2020年代は、いったいどんな10年間になるのでしょうか。恐らく社会は今まで以上の速さで変化していくに違いありません。私たちは、その変化がよい方向に進んでいくようにしなければならぬと思います。

12月の初めには、アフガニスタンで支援活動をしていた中村哲氏が殺害されるという大変痛ましい事件が起きました。本校の前校長和佐野健吾先生は、中村氏と西南学院中学での同級生でしたが、中村氏のことを語る時「善きサマリア人のたとえ」（新約聖書ルカによる福音書10章25節～37節）を引用されていました。誰もが中村氏のような生き方ができるわけではありませんが、氏がよく言われていたという「照一隅」という言葉のように、たとえ与えられた光の大きさは一人ひとり違ったとしても、子どもたちには自分の置かれた場所を照らしていける人間に育ってほしいと願っています。

本年もどうかよろしく申し上げます。

（ 文責 宮崎 隆一 ）